表参道日記 136

1974年（昭和49年）

文 伊藤公一 text by Kouichi Ito

多くの著書がベストセラーであったジャーナリストで評論家の立花隆（本名・橘隆志＝たちばなたかし）氏が4月30日に80歳で逝去した。政治、医療、宇宙、宗教など幅広い分野の問題を追求し、第一線を走り続け、その類なき知的欲求を幅広い分野に及ばせているところから「知の巨人」のニックネームを持つ氏だったが、なんといっても、その名を轟かせたのは1974年、月刊文藝春秋に掲載された「田中角栄研究〜その金脈と人脈」であろう。

田中角栄首相失脚のきっかけをつくった世紀の発表時、小生は高校2年生であった。

独協学園で気楽な男子校生活を過ごし、天気予報や社会ニュースには全く関心を抱かず、無論、政治にも興味がなかったわけだが、通学途中に目白の田中御殿があり、毎日、その立派な門扉にマスコミが殺到する姿を見ていた。天皇陛下が皇太子時代にセキュリティに囲まれつつ専用車で学習院に通学される光景もあり、その頃の目白通りは実に華やかであった。

とはいえ、無教養な高校生でも、立花隆氏の名前は鮮明に記憶している。その後、極めて単純な汚職であったロッキード事件の真相を書物で知り、いつのまにか英雄となった田中角栄の列伝にも触れたが、あらためて注目すべきは取材をまとめた時期の、立花氏の年齢である。なんと34歳。医者の年齢でいえば、やっと一人前かなと言われる年端である。

驚くことに30歳代前半の若者が、現職総理大臣の犯罪を暴いて失脚させたわけだ。その原動となった文藝春秋社。月刊誌・文藝春秋は硬派な正論誌として、週刊文春はスキャンダル暴露の場として健在である。

そして今や文春砲と呼ばれ、有名人の人生を破壊しながら、競合の週刊新潮を凌駕しつつ発展中であるが、扱う題材が、立花氏の偉業を思えば、はるかに小物になってしまったように感じる。

1974年以前、自分は、さらにニュースに関心のない子どもであったわけだが、当時は石原裕次郎、長嶋茂雄、美空ひばりの高度経済成長期に人々の心の拠り所であったスーパースター3名に対しては悪口を叩かない、不利益となる記事を書かないといった掟があったと聞いたことがある（都市伝説かもしれないが）。

浅間山荘事件の解決で学生運動も完全に終息し、バブル景気が始まるまでの、のんびりした時代。1974年は時代の転換期であったものかと勝手に振り返る。

いずれにしても昭和が遠くなってきた。

Profile
1958年生まれ。伊藤病院３代目院長。
北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。
東京女子医大、筑波大大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。
日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。
伊藤病院 http://www.ito-hospital.jp/
名古屋甲状腺診療所（名古屋分院）http://www.kojin-kai.jp/nagoya/
さっぽろ甲状腺診療所（札幌分院）http://www.kojin-kai.jp/sapporo/